エッセイ

世界へ 世界から

ワールドカップと日本人のDNA

佐野眞一

特別なサッカーファンというわけではないが、ワールドカップの中継はやはりテレビの前にかじりついてしまった。

日本代表の成績は周知の通りなので、もう何も言うつもりはない。

日本人の身体能力が、技術レベルが、決定力が云々と、スポーツ評論家風の利いたようなことを言ったところで、いまさら結果が覆るわけではない。世界レベルとの差を素直に認めればいいだけのことである。

それよりも強く感じたのは、日本人のDNAは六〇年以上経ってもほとんどかわらないな、ということだった。

ある民放テレビは、予選リーグのクロアチア戦の中継を前に長時間の特番を組み、日本代表の予選リーグ突破を祈念して女子アナに全国各地の滝行をさせ、お笑いタレントに護摩焚きまでさせた。

これには呆れて開いた口がふさがらなかった。これでは、愛国婦人会が戦時中出征兵士に送った戦勝祈願の千人針とまったく同じではないか。

ワールドカップ開催中、昭和一〇年代の満州に関するノンフィクションを執筆していただけに、その思いはなおさらだった。

日本代表を応援する熱狂的なテレビのアナウンスは、時計の針を満州時代に戻したかのような錯覚すらときどき起こさせた。

テレビをはじめとするメディアの報道は、ありもしない希望的観測だけを大声で伝えるという意味で、"大本営発表"と何もかわらなかった。

そこには日本代表の戦力を冷静に分析して批判的にとりあげる者は、"国賊"とでも言わんばかりの不健全で硬直した思考が露骨にあらわれている。

勝負はやってみなければわからない。もしかすると神風が吹くかも知れない。

東条内閣を支持し、あの無謀な戦争に突入させていったのも、こうした国民的メンタリティーだった。

庶民のささやかな幸福を願う滝行や護摩焚きを、ワールドカップ戦勝祈願の"国民的"ツールに使ったメディアは、時代錯誤という以上に不気味な暴走を感じさせる。

さの しんいち／1947年東京生まれ。早稲田大学文学部卒。出版社勤務などを経てノンフィクション作家に。著書は『旅する巨人』(文藝春秋)『カリスマ』『東電OL殺人事件』(新潮社)など多数。最新刊に『戦後戦記』(平凡社)がある。

月刊 みんぱく

目次

OCTOBER 2006 月刊みんぱく 10

01 エッセイ 世界へ世界から
ワールドカップと日本人のDNA
佐野 眞一

02 特集 眠る
文化としての眠り
高田 公理
霊長類の眠り、人間の眠り
山極 寿一
社会生活のはじまり
野村 雅一

カレンの夢語り
速水 洋子
イヌイットの眠りと姿勢
岸上 伸啓
夢は、現か幻か
—シャーマンの神がかりと睡眠—
末成 道男

08 未来へひらくミュージアム
人を集める・人が集まる
—長崎歴史文化博物館の実験—
野間 誠二

11 表紙モノ語り
イワラビティのハンモック
中牧 弘允

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
巨大な移民村の出現
児玉 香菜子

15 時論・新論・理想論
うすよごれた板きれなんだけど
佐々木 利和

16 外国人として生きる
日本のなかのブラックボックス
南 真木人

18 地球を集める
ゴング音楽とアラック・ヤーン
寺田 吉孝

20 生きもの博物誌
森に棲むナマズの力
松田 凡

22 フィールドで考える
ブラジルへ渡った「三番叟」
中村 茂生

24 公開講演会
多文化共生を考える
—オーストラリアの現場から—
次号予告・編集後記

※表紙解説は11ページ